



Title	日英博覧会及び近代輸出陶磁器業界において藪明山の果たした役割について
Author(s)	井谷, 善恵
Citation	デザイン理論. 2022, 79, p. 52-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86309
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日英博覧会及び近代輸出陶磁器業界において 藪明山の果たした役割について

井谷 善恵 東京藝術大学

はじめに

藪明山（1853-1934）の大阪薩摩は、薩摩金襴手として、沈壽官（12代）窯の薩摩焼、錦光山宗兵衛（7代）などとともに幕末・明治以降欧米で爆発的に人気を博し、海外の博覧会でもさまざま賞を受賞している。藪明山が高く評価される要因の一つに、小さな磁胎に精緻な絵付を施している点が挙げられる。1910年の日英博覧会后、日英両国で報告書が公刊され新聞による評価も公開されている、今回は日英博覧会を中心に、その評価を通じて藪明山が近代輸出陶磁器業界で果たした役割について考察する。

藪明山作品 ― ハリリコレクションと平成コレクションの比較

藪明山の作品を内外に先駆けて紹介したのとして『ナセル・D・ハリリコレクション ― 海を渡った日本の美術』（1995年 同朋舎出版、以下『ハリリコレクション』）があり、103点の藪明山作品が紹介されている。今回、『藪明山の世界』（2020年 いなほ書房）に掲載の147点の作品との比較を行った。

一つの作品に複数の意匠があるのが藪明山の作品の特徴でもあるが、今回は両著で正面に記載された画像を中心に調査を行い、その結果、最も多かったのが風俗画であり、『ハリリコレクション』で37点、『藪明山の世界』で22点であった。どちらも風俗のテーマは多岐にわたっている。

日英博覧会

1910（明治43）年5～10月にロンドンのシェパーズ・ブッシュにて日英博覧会が開催された。

藪明山は安藤重兵衛（1876-1953）、深川忠次（1871-1934）、錦光山宗兵衛（1868-1927）らと共に商議員に任ぜられ、また大阪出品同盟会の理事にも任ぜられている。

大英博覧会出品作品

今回は、日英博覧会出品協会残務係編『日英博覧会出品協会事務報告』（以下『事務報告』）と審美書院版『日英博覧会新美術出品圖録』（以下『美術出品圖録』）及び、英語版2点（“*The Japan-British Exhibition of 1910, A Collection of Official Guidebooks and Miscellaneous Publications*”（以下“*Official Guidebooks*”）と“*Japan-British Exhibition, 1910 Printed by Bemrose & Sons Limited, Derby and London*”，について調査を行った。

『美術出品圖録』にある藪明山作「陶器井人物」「陶器花瓶花鳥」「陶器浮形茶碗 人物年中行事」「陶器香盒 人物菊詰」は英語版に記載の4点とも一致した。「陶器井人物」と「陶器花瓶花鳥」については、ハリリコレクションに白黒写真が掲載されており、また、「陶器浮形茶碗 人物年中行事」と「陶器香盒 人物菊詰」も併せて、4点とも“*Official Guidebooks*”に写真が掲載されている。「陶器深形茶碗 人物年中行事」については、「ハリリコレクション」掲載の「大名行列遠景富士図 深鉢」がほぼ同一の深鉢とされる。

上記の記録ではいずれも出品作が4点となって

いるが、『日英博覧会大阪出品同盟会報告書』によれば、藪明山の出品数は31点となっている。

これは、美術品出品審査が明治42年に東京と京都で行われ、陶磁器・七宝・硝子の分野では171点のうち46点が美術品と認定され、その中に藪明山作4点が含まれており、それ以外のものは「普通商品」として出品されたと推察される。

作品への評価

『事務報告』によれば、陶磁器は「茶器、珈琲器、菓子皿、果物丼の如く一般に日用品として使用せらるものは大部分売約済」となり、「花瓶、香炉、置物等の如き小形のものに限りよく売れた」が、大型の花瓶の中では来館者から「器形、絵模様の純日本的なるものに対して大いに称賛するものあり」として、産地別では、「価格が比較的低廉にして装飾華美なる九谷焼は最も好評」で「有田焼の錦手はこれに次ぎ」そして、「京都・大阪の薩摩風の陶器は細密の絵付を施したるもの及び神奈川真葛焼の美術的趣味あるものは相当の売れ行きを見たり」とある。「大阪の薩摩風の陶器」は出品者名などを見ても藪明山作品と考えてよい。

英国側から見た評価として、“*Official Report Japan-British Exhibition London 1910*” (Unwin Brothers 1911)にある陶磁器の項では、「宮川香山の非常に詳細な細工を施した菊の意匠の花鳥花瓶」「清風与平の香炉」「三浦竹泉の花図の磁器鉢」「錦光山宗兵衛の菊図の花瓶」「伊東陶山の優美な麦図花瓶」と並んで、「藪明山の桜花花瓶も素晴らしい」とあり、清水六兵衛の作品と加藤友太郎の鉢も評価が高い。この場合、ここにある「桜花花瓶」とは「陶器花瓶花鳥」であろう。また、「今回の展覧会には、最も優れた窯から出品されており、これらの陶芸作品は多くのヨーロッパ人の見学者の目を惹きつけている」と結論付けられている。

新聞にある評価としては：1910年4月16日の“*Pall Mall Gazette*”に“*FAMOUS JAPANESE TRIO Artist Coming to London*”と題して、「三人の

最も偉大で代表的な三人の陶芸家、真葛香山、錦光山宗兵衛、藪明山の訪英」が特集されている。藪明山については、「たえもっても偉大な芸術家といえないとしても、陶器の装飾に関しては最も精緻なことができる作家」とあり、「父親（藪長水 1814-1867）よりその息子である明山の作品のほうが高く評価される」と記されている。

1910年6月13日付の“*Pall Mall Gazette*”紙にも、評論家 A.E.Reveirs-Hopkins により、藪明山は「大阪から出品の卓越した陶器の装飾芸術家」であり、彼は「精緻な作品を何点か出品しており、陶磁器ギャラリーに展示された三点は特に素晴らしい」「陶器香盒は彼独特の菊詰め of 精緻な仕上がりで、£2 という価格はその大きさにすれば高価だがこれはそれだけの価値がある。」とある。そして「他の二点の鉢は、どちらも人物が意匠として用いられているが、東洋の陶工が作り上げた最高の作品の出来を証明しているといえる。彼は短期間で飽きられてしまいがちな商業的要求に迎合する代わりに伝統に沿って制作したのである。」と結ばれている。

これらの評価を総合すると、日英博覧会において、真葛香山と錦光山宗兵衛と並んで、藪明山が当時の日本の代表的陶芸家であり、その作品が高く評価されていたことはまちがいない。

おわりに

藪明山は1934（昭和9）年に82歳で閉じたが、その一生は、まさに近代から現代へと移りつつある日本の輸出陶磁器業の歩みと共にあった。

日英博覧会の英語による公式記録及び新聞でも、真葛香山や錦光山宗兵衛と並んで藪明山が高い評価を受けており、その中でも風俗画への評価が高いことが実証できた。さらに、藪明山が陶芸家というよりアートプロデュースという役割を担っていたことは従来いわれてきたことであるが、今回、その技法が「伝統に沿うもの」とイギリスの新聞が評したことは興味深い。